

## 飯田龍太の俳句 —第七句集『涼夜』・第八句集『今昔』より—

太田 かほり\*

飯田龍太の全十句集から第七句集『涼夜』・第八句集『今昔』を考察する。龍太55歳から60歳のこの時代は私生活においては平穩に過ぎ、俳壇の中枢に位置しながら各地句会への参加・評論・随筆・講演・対談などが頻繁に続き、多忙を極めている。執筆は、評論集『芭蕉の本』『日本の詩歌』、随筆集『無数の目』『思い浮かぶこと』、その他『龍太俳句教室』『龍太俳句作法』『俳句の魅力』『俳句鑑賞読本』『作品のこころ』の刊行、また、角川源義・安東次男・大岡信・上田三四二などと対談を行っている。

龍太の業績は、清新な詩情と気品ある清張で称えられる俳句の創作が第一であるが、同時に、評論や随筆の執筆を通して俳句の本質を示したこと、また、後進の指導に当たり多くの優れた俳人を輩出した点においても高い評価がされている。「詩は無名がいい」「俳句というものは、いわば、北窓の風景のようなものだ」などの名言があり、これらは、龍太亡き後も、俳人たちが座右に置く言葉となっている。龍太の50代後半の旺盛な執筆や対談や全国的句会参加はこれら龍太の俳句論の礎となり、また俳句作品はそれに沿ったものであった。龍太の俳論に基づいて実際の俳句作品を検討していく。

**Key Words** : 自然への憧れ, 風土への愛着, 人間への関心

### はじめに

平成19年に飯田龍太が86歳の生涯を閉じてから今年で5年余、平成4年に長い歴史を持つ俳誌「雲母」が900号で終刊してから20年余が経過した。龍太を失ってからの俳壇は、世代交代が進行し、若い作家や論客が出て来ているが、全体を牽引する力には至っていない。

---

\* 人間学部児童発達学科

この一年間を展望すると、俳句にかかわる出来事の多くは高齢化による俳人の死去、渡辺水巴創刊の「曲水」・廣瀬直人創刊の「白露」など有力または老舗の俳誌の終刊、主宰の交代などが上げられる。飯田龍太ゆかりでいえば、「白露」の終刊、山本健吉文学賞に鈴木豊一が決定、「雲母」の同人和田知子の「蛇笏憧憬」刊行、山梨県立文学館において「没後50年飯田蛇笏展」開催などが上げられる。また、芭蕉研究はじめ日本文学に精通したドナルド・キーンの日本国籍取得は、大きなニュースであった。

## 1、ドナルド・キーンの日本国籍取得

2011年度の俳壇および文壇の最大の話は、海外での日本文学研究の第一人者のドナルド・キーンが日本国籍を取得し、日本永住を決めたというニュースであろう。東日本大震災後に日本在住の外国人の多くが帰国する中でのキーンの帰化の表明は、日本人に大きな感動と勇気をもたらした。「家族を失い家を流されても、じっと耐え忍ぶ東北の人々の姿を見て、日本人になりたいと思ったのです。黒い津波が押し寄せる映像を何度も見ながら、松島は、中尊寺はどうなっただろうと眠れなかった。私のここはすでに日本人です。」（2011.11.2付読売新聞）と語っている。また、国内一線の俳人が超結社でつくる「件の会」は、第9回「みなづき賞」に、『ドナルド・キーン著作集第1巻 日本の文学』（新潮社刊）を選んだ。この賞は、前年度の1月から12月までに出版された俳句に関する書物を対象としている。第7回は、中村誠・飯田秀實が受賞している。飯田秀實は飯田龍太の長男である。みなづき賞の贈賞式は2012年6月8日、東京・山の上ホテルで行われ、俳人金子兜太・友岡子郷・矢島渚男・高野ムツオ・池田澄子はじめ171名の参加があった。金子兜太・仁平勝等のスピーチの後、キーンは黒田杏子のインタビューに応じた。形式はインタビューであったが、メインとなった三項目の質問についてはほとんどキーンの講演の形となった。『源氏物語』・『奥の細道』・正岡子規について、流麗な日本語でのスピーチは時にユーモアを交え、40分ほどに及んだ。『奥の細道』に関しては、100回読み返した由、「杜甫は五言律詩に〈国破山河在〉と詠んでいるが、芭蕉が訪ねた奥の細道で残っていたのは言葉であった、碑に刻まれた言葉が残り、山が崩れても川が涸れても芭蕉の言葉は永遠に残る」と述べられたことに聴衆の共感が集まった。『奥の細道』の多賀城の壺の碑について、芭蕉は、『むかしよりよみ置ける哥枕、おほく語伝ふといへども、山崩れ川流れて道あらたまり、石は埋もれて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば時移り代変じて、その跡たしからぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。』と記している。この会には阪神淡路大震災の友岡子郷、東日本大震災の高野ムツオ他、被災した俳人の参加もあり、タイムリーでもあり説得力のある話であった。国語教育については、『源氏物語』などの古典は現代語訳を先に読んでから原文を読むべきであると提言された。

## 2、「白露」の終刊

平成4年に長い歴史を持つ俳誌「雲母」が900号で終刊した後、平成5年3月に飯田蛇笏・龍太の系譜を受け継ぐ俳句誌として廣瀬直人主宰の「白露」が創刊されたが、主宰の病氣療養のため、平成24年6月号をもって19年の歴史の幕が下ろされた。会員約二千人を擁する大結社であった。廣瀬直人は、「白露」創刊号において次のように述べている。「他人のいい句には率直に感銘し、賞められたら素直に喜び、欠点の指摘は奮発の材料にする仲間とのつながり、これが、近年話題になっている“結社の時代”を支える基盤ではなかろうかとも思うのです。（廣瀬直人『「白露」創刊に当って』『白露』一九九三・三）。同誌5月号には終刊を告げる廣瀬氏の文章が掲載された。「創刊以来、飯田蛇笏、飯田龍太両先生の詩精神、友愛の心を引き継ぐべく努めてまいりました。殊に、俳誌にとって選はいのち、と肝に銘じておりましたが、主宰としてその任が果たせない今、終刊を決しました」というものである。飯田龍太が、やはり「選はいのち」として突然の終刊を決意し、俳壇に大きな衝撃を与えた。その後、廣瀬は、平成17年に没した福田甲子雄の協力で「白露」を牽引（けんいん）し、師系を尊重しながら地元甲州の風土に根ざした句作と選句に全力を挙げてきた。その終刊は「雲母」の終刊に重なる潔いものである。

平成24年8月、「白露」誌友全員の代表作（自選5句）をまとめた『白露句集』（特別号）が発行された。既に亡くなっている会員の5句も掲載されている。次は、廣瀬直人氏の5句のうちの一節である。

山国にがらんと住みて年用意      廣瀬 直人

山梨県笛吹市は甲府盆地の中央部にあり、周囲を圍繞する峻厳な山々の中にぽっかりと市街地が抱かれ、その空間は見渡すかぎりの空と同じく広々としていて「がらんと」という形容通りの地形である。ここに、飯田蛇笏、龍太が生まれ、住み、俳句を詠み、その二人を師と仰ぎながら作者も生活してこられた。蛇笏龍太の国として特別な土地ではあるが、作者の感慨は日本の他の多くの山国の人のものと多くは変わることはないだろう。山国に生きるとは閉ざされる事も、物も、少なくはないという環境に生きることである。「がらんと」には、事や物を求めない心を捉えている。自然により近く、簡素、素朴な日常であるが、時流に遅れたり、チャンスを見逃したりという不の側面には甘んじる覚悟が要る。世俗からというよりは自然から得るものを選択した人生といえるだろう。「がらんと」から、物によってではなく目には捉えにくいものによって満ちたすことのできる大きな容れ物のようなものを想像する。作者にとっての故郷の山国のがらんとは心のままに使うことのできる巨大な空間に違いない。自然といそしみ、心穏やかに暮らせ、句が生まれてくる舞台であれば、どのようなところよりも優る。日常をそのように位置づけ、一年の節目にはけじめの仕来りを執り行う。迎春の準備を整え、がらんと

した中での秩序を整えていく。「年用意」に山国に生きる気概、氣息を籠めている。

### 3、鈴木豊一の山本健吉文学賞

龍太は山本健吉の確かな批評眼と豊かな詩眼を高く評価し、『理論の限界を詩眼でひらき、詩眼の飛躍を理性で抑える。この微妙な兼合いに、氏の文脈の醍醐味が秘められているように思う。実作は試みないかもしれないが、氏は、本質的な詩人であると思う。あるいは贅沢な詩人といってもいい。』（『山本健吉全集第8巻』解説、講談社、1984年4月）と書いている。飯田龍太は、山本健吉の現代俳句に対する厳しい批判によって、緊張を強いられ、かつ、創作への意欲をかきたてられた一人である。角川書店に勤務し、長く「俳句」の編集長を務め、龍太が最も信頼を寄せた編集者に鈴木豊一がいるが、彼もまた、学生時代から健吉の影響を受けてきた。

その鈴木豊一の『俳句研究ノート』は、第12回山本健吉文学賞に決定している。選考委員は俳誌「百鳥」主宰・朝日新聞俳壇選者の大串章と俳誌「岳」主宰・現代俳句協会会長の宮坂静生である。この賞は、古典から現代まで日本文学に深く通じ、特に今日の詩歌の発展に大きな業績を残し、今なお短詩作家や評論家の指標となっている山本健吉の業績を顕彰し、一年間で最良の仕事をした俳人、評論家を表彰するものである。鈴木豊一は、角川書店の月刊「俳句」「俳句研究」などの編集長であった。また、『現代俳句体系』『飯田蛇笏集成』『飯田龍太全集』『山本健吉俳句読本』などのシリーズを企画・編集した。なお、筆者の『俳句回廊』『鷹羽狩行の俳句』（角川書店）は、鈴木豊一の助言により刊行できたものである。鈴木は、「山本健吉がきりひらいた小さな肖像（ポルトレ）という作家論の方法を知った。それを私なりに実践した」と受賞の言葉を寄せている。

『俳句研究ノート』は、作家論・俳人論・俳句論などからなる。角川書店入社から退職までの長期間の編集者としての豊かな経験、深い教養、広い視野により俳句の本質論を展開している。選考委員の宮坂静生は、「深く切り込みながらも、さっと切り上げるといふ、切り上げ方が上手い。飯田龍太さんから学んだ手法、井伏鱒二さんとも似ている。」と評し、大串章は、「季節感というのが、抽象的な言葉としてだけでなく、具体的に出て来る。日本人の持っている季節感、心、要するに生命感に触れておられるのも、特徴的な書き方です。」（月刊「俳句界」2012年8月号）と述べている。

なお、鈴木豊一は2012年よりブログにて「俳句は自伝」を開設し、月一回のペースで親交のあった俳人の論考を更新中である。すでに、飯島晴子・福永耕二・阿波野青畝・能村登四郎ら十俳人の論考が掲載されている。批評家の目による論考はいうまでもなく第一級であるが、余禄のように綴られている直接かかわった俳人たちの素顔やそれぞれのエピソードからは職業を超えた人間的な交わりが回想され、一度は作家を志した鈴木豊一の文筆家としての醍醐味がある。

#### 4, 和田知子の『蛇笏憧憬』

「雲母」および「白露」で活躍してきた和田知子が、平成23年12月に『蛇笏憧憬』を上梓した。弟子でもなく家族でもなく研究者でもなく、しかし、どれも当てはまるような視点からの重厚な蛇笏論である。蛇笏論というより実録蛇笏、または小説蛇笏というべきか。書名の通りの蛇笏への深い傾倒から紡ぎだされた文章である。一句の周辺を書いて人間蛇笏に肉薄したすぐれた洞察力である。

蛇笏には容易に他者に踏み込ませないものがあつたのではと思われるが、息子の龍太さえも黙っていたものが、和田の手によってくっきりと掘り起され、俳人としてだけでなく、人として尊敬できる蛇笏の人物像が描き出されている。冒頭の「俊寛」は類想のない筆運びであるが、しだいに三人のご子息の死に及ぶ。子の親としての蛇笏の心を推し量った部分は、和田すなわち蛇笏のように感じられ、子息の龍太さえも踏み込まなかつた奥深くに和田の文章は迫っている。和田が書かなければ、触れてはならないものとして誰も沈黙したかも知れない部分である。研究者でもなく読者でもなく近くに長くいた者の強い憧憬あつての文章である。龍太の年譜にほかされている部分をこの著書は別の形で明らかにし、あらぬ好奇心を封じる結果になっている。

『龍太全集』中の随想などにおいて、龍太は父蛇笏についてはあまり書いていないが、和田の率直な切り込みは子ゆえに書かなかつた奥深くまで及んでいる。また、龍太は自句自解においても句そのものの解釈などしていないのは、和田も同じ姿勢である。一句の周辺を広く描き、句そのものは読者の想像と創造にゆだねる。そのため読者は鍛えられ、句に対しては自力で向かい合うよりほかない。

また、平成24年4月12日の山梨日日新聞には、友岡子郷による『蛇笏憧憬』の書評が掲載された。山梨日日新聞は優れた地方新聞であるが、これも飯田蛇笏、龍太の存在抜きにはあり得なかつた文化レベルの高さである。友岡子郷の文章もまた、蛇笏、龍太への畏敬と憧憬あつてのもの、和田の畏敬と憧憬がわがことのように書かれ、蛇笏・龍太父子の影響はその死後にも及び、なおも弟子を鍛えてつづけていることに改めて驚かされた。

##### 一、句集『涼夜』

あとがきは、『五月書房の和装本シリーズの一卷として出す『涼夜』は、私の第七句集にあたる。昭和50年から昭和52年夏までの約二ケ年半の作品から、計210句を収録した。稿をととのへた夜がたまたまそのやうな感じであつたから、そのまま書名とした。』と短い。龍太55歳から57歳にかけての作品である。1993年3月号「俳句研究」に飯田龍太「自選150句」が掲載されているが、『涼夜』からは6句を選んでいる。また、龍太死後に発見され2010年に刊行された『龍太語る』に掲載された「自選80句」にも6句を選んでいるが、

両者に重なるのは2句である。全十句集では6句は最も少なく、数ある龍太の主な作品として話題になる句は多くはない。大岡信は、『全体が淡白に傾き、料理で言えば、しかるべき品々が出たあとに軽く出される蕎麦とか茶漬とかいったもの』（昭和53年10月「俳句臨時増刊 飯田龍太読本」）と評している。収録句数210句は十句集中で少なく、二年半余の短期間であるが、代表作や愛唱句として採り上げられる作品は多くはない。自選の入れ替えは龍太自身の自己評価を表すものであろう。

## 1. 龍太「自選150句」より

かるた切るうしろ菊の香しんと澄み

（昭和50年）

【旧家】飯田家は山梨県笛吹市郊外の静かな山間にある。蛇笏の生涯77年、龍太86年の歴史を刻み、日本全国から俳句と蛇笏・龍太父子を敬愛する俳人はじめ文化人がしばしば訪れた「山廬」である。後山と呼ばれる山を後ろにし、屋敷内とも外とも分かちがたい自然そのものの中に今なお旧家の風格をとどめている。屋敷の裏側に回り、池を右手に見ながら小道を行くと、小さな川の流れに出会う。橋が架かり、登り道が続き、上り詰めた所からは、峻厳な甲斐の山々が遠望できる。

この句の鑑賞に当って、まず広く甲府盆地を俯瞰し、しだいに笛吹村小黒坂の後山および飯田家の座敷へとレンズを絞り込むような視点から入っていくのがよい。豊かな自然の中に長年続いてきた旧家の座敷へと絞り込むことによって、華やかな正月の遊びの「うしろ」の「しんと」した気配が最もそれらしく伝わってくる。飯田家に正月の客が集い、男たちは酌み交わし、女たちは輪を作って遊ぶ。表座敷・奥座敷・仏間など、どの部屋も人々のざわめきを容れてもなお大きく余白を残す。一家の主である龍太の目は、客をもてなしつつ、時折、余白の空間に注がれる。華やかな遊びのざわめき、正月飾り菊の清新な香り、これらが主の心に新春の安堵感をもたらす。賑やかさと静けさ、動と静、音と香りが同時に描かれ、家の内が立体的に見える。

春の夜の藁屋ふたつが国境ひ

（昭和51年）

【時代性】甲斐は信濃・駿河・武蔵・相模の四つ国と接する山国である。国境はもとより人が定めた境界であり、目に見えて違いがある訳でも線引きがされている訳でもない。村人たちにはこの辺りが境目であるという漠然とした認識があり、言い伝えのようなものがあり、そこにちょうど二軒の藁葺の民家があって、その目印に都合よく、「藁屋ふたつ」が人々の会話にも使われているのだろう。国境を説明するにはからずも土地柄・時代性が表れて、そこらしい雰囲気や漂わせている。「そこらしさ」は、龍太が詠んだそこではあるが、同時代に共通す

る自然環境は日本中に点在し、この句に普遍性をもたらしている。徒歩による移動が主であった頃、四季折々に通る道であり、とある春の夜、おぼろにかすんだうす闇の中にぼんやりと家二軒が浮かび上がっている。藁という素材で葺いた屋根の丸みを帯びた輪郭が春の夜の雰囲気にも溶け込んでいる。そこに季節感を見ている。「ふたつ」という数にも、春の心になう。人里から離れた孤立感の中にも複数であるという安堵感がある。国境としての目印は昼間こそ出番であるが、春の夜のこととして、人の心にも現実の土地の上にも引き難い境目を緩やかにほかした。

朝寒や阿蘇天草とわかれ発ち

(昭和52年)

【切れ味】「肥後・天草小旅(10句)」の前書が付く。朝寒のア、阿蘇のア、天草のアの三つの同音がリズムを刻んで、宿を出発する朝の慌しさを動的に捉えている。秋深まる頃、旅の宿で迎えた朝の冷え込みは微妙な緊張感をもたらす。旅には開放感とともに緊張感が伴うが、季節の深まりは予想外のことで、そこに旅情を深め、感慨を重層的にする。時間が経てば昨日と同じ爽秋を楽しむ旅の続きとなるのだが、短い旅程のうちにも季節は進行していることに気づいて、「朝寒や」の詠嘆になった。さらに、宿を出ればここまでの道連れと袂を分かつことになる。方や阿蘇へ、方や天草へ、その行き先は異なってくることも一段と旅情を深め、旅のあわれのみならず人生のあわれにまで思いを広げ、そして深める。人生は旅、旅は別れ、こんな小旅も人生的な縮図を呈している。「わかれ発ち」の五音はそれぞれの目的地に向かって連れと別れ、そして、それぞれが同時に出発するという二つの動詞を並べたものである。説明すれば長々しい動作であるが、動詞を重ねて龍太独自の複合動詞的用法で端的に表した。

大岡信は、下五のわかれ発ちの語調の張りに『いかにも龍太の句だと思わせる切れ味のよさがある』「俳句臨時増刊 飯田龍太読本」(昭和53年刊)と評している。

凍雲に湧きて微塵の山鴉

(昭和52年)

【大景の把握】同じく「肥後・天草小旅(10句)」の前書が付く中の一句である。短い旅の間に季節は深まり、空を覆う雲は凍てついている。旅ほど季節や天候などの自然条件に左右されるものはないが、自然を友とする俳人には最も望ましいシーズンというものもなければ天候もない。変化こそ最も歓迎すべき対象というべきである。晩秋から冬へ、空には冬雲が垂れ込め、旅の一日ははや暮れようとしている。こんな時刻に鴉が湧くように現れ、その黒い一塊はみるみるうちに四方八方へ、広い空に小さな無数の点々となって広がる。山鴉と見分けられた時にはある程度の大きさであったものが見事に小さな黒一点となった様子を「微塵」と捉えた。塊から点へ、動から動へ、空の一部から空全体へ、山鴉の習性と冬の夕方の一光景を描いた。

冬晴れのとある駅より印度人

（昭和52年）

【意外性】 森澄雄の「炎天より僧ひとり乗り岐阜羽鳥」（『鯉素』1977年刊行）が発表されるや、俳壇では大きな話題となったが、龍太句が先行する。冬晴れと炎天、とある駅と岐阜羽鳥、印度人と僧が対比される。龍太句では印度人が、澄雄句では岐阜羽鳥が句の要となる。どちらも取り合わせの意外性に面白さが認められるが、よりどちらに意外性が強いとなると、龍太句に軍配が上がる。前者にはストーリー性があり、読者の好奇心を煽るところがあるが、後者は一瞬の驚きに焦点化される。とある駅は、たとえば新宿や渋谷など都会のよく知られた駅ではなく、およそ異邦人が下車しそうでない地方の駅というくくりになる。目鼻立ちがはっきりしているか、服装に特徴があるか、すぐにインド人とわかるような人物が句から立ち上がってくる。日本人にとってインドは遥かでありながら旧知とってしまう国である。ロシア人でもアメリカ人でも句にならないインドとの歴史がある。政治的にはほとんど無害である点でも読者に受入れられ易い。甲斐の隣国の信州安曇野の中村屋をめぐる物語にインド人が登場してくるが、そんなドラマ性がこの句の味わいである。岐阜羽鳥は東海道新幹線に新たに設けられた新駅であり、およそ新幹線が止まりそうでない田園風景の中にあることや、政治家の某の力が働いたという噂などである時期話題になった。季語の据え方についてはインド人に冬晴れ、僧に炎天が選ばれた。熱帯のインドに対する冬は真反対の季節によって対比を鮮やかにした。冬晴れの青さがインド人のシルエットをはっきり描く。岐阜羽鳥は陸の孤島のような所に近代的な駅があり、炎天という過酷な天候の下に置かれることで地元にも多くは貢献できない乗り降りの少ない駅の当初からの宿命がうかがえてくる。こうした二句の比較を通して龍太句のよさに迫ってみた。両句共に制作年からと時間が経過し、それぞれに個別の鑑賞のされ方が固定化している。

梅漬の種が真赤ぞ甲斐の冬

（昭和52年）

【象徴性】 盆地の夏は暑く、冬は寒い。寒さの厳しい冬、戸外はもとより家の中からも色彩が消えていく。咲く花はなく、一輪挿しさえ飾られることがない。色彩ばかりか物音も少なくなっていくのが冬である。物寂しさと静けさが辺りを覆い、生き物の動きも稀となってくる。そんな冬の日常の中で、目をひく赤い色と遭遇した。遭遇といたい不意の出会いである。毎年六月頃、青梅を収穫して梅干にしたり梅漬けにしたりして保存食を作る。梅漬けは赤紫蘇を加えておくと時間の経過とともに鮮やかな美しい紅色の液体になる。何年も経過して古くなると梅酢も梅も赤茶色か赤紫になっていくが、まだ今年漬けたばかりの梅はぷっくり膨らみ噛めばがりりと歯ごたえがよく、吐き出した種は驚くほど赤い。梅は保存食であり、副食であり、防腐剤代りにもなって地味な用途ながら必需品である。毎年梅を漬け、家のどこか奥まったところにひっそり保存し、切らすことなく常備される。その一連の作業とともに梅漬けの梅その

ものが、ある意味で家風のような存在感を持つ。梅の種の赤さに驚き、梅は一家の芯のように、核のように感じられたとしても、大げさではない。冬の花のようにも見える梅の赤さである。そしてそれは甲斐の国の核のようにも思えてくる。

## 2, その他の作品から

春がすみ詩歌密室には在らず

(昭和50年)

【詩歌論】近場を見ているだけでは詩ごころは湧いてこない。近景にのみ心を捉われていては詩の神から見放される。詩人たる者は、まずは、大きな自然の懐に身を委ねてみるがよい。書斎に籠っている詩囊が膨らまない。窓から覗くのでは実際のサイズは測れない。サイズがないのが大自然、ないサイズを五七五の十七音の極小サイズに仕立て直して、なおも嵌り切らないものを俳句の器から溢れさせるのが、詩人の仕事である。閉じこもるなかれ。頭で自然を見るなかれ。外に出よ。目で見よ。身体で、五体で、全身で見よ。そうすれば、詩歌の神々が微笑みかけてくるだろう。鳥のさえずり、若草の色、花々の香り、風の優しさなどに包まれ、作為は消え、消えたところに詩囊が育まれる。

桑の実の紅しづかなる高嶺かな

(昭和50年)

【中仕切り】山国は桑の栽培用に適しているためか、養蚕が盛んであった。蚕は葉を大量に食べ、子ども達は実を楽しみにした。好きなだけ採っては食べ、食べては採るのがたまらない魅力である。競って食べて、真っ赤に染まった口を開けて見比べ、また食べる。紫の実の形も大きさも地味で満腹感には遠いが、山国の子どもへの季節の副産物であった。大人には一粒か二粒か、せいぜい掌の窪みに収まる程度の恩恵である。だが、桑の記憶は紅の色のように鮮やかに残り、回想なしに桑の実を見ることはない。子どもの頃の兄弟の面影もよぎる。この句の静けさは、飯田家のその後の怒涛の家族史を切り離して、今と戦中戦後を飛び越えたかなたの昔との二重構造におくことによってもたらされる。しかし、幼い頃の兄弟たちとの思い出がその先に及ばないということはなく、「しづかなる高嶺」はしだいに霞んでいったはずである。本句集は、大岡信が龍太作品の中仕切りと位置づけ、『全体が淡白に傾き、料理で言えば、しかるべき品々が出たあとに軽く出される蕎麦とか茶漬とかいったもの』(昭和53年10月「俳句臨時増刊 飯田龍太読本」)と評している通り、第一句集から第六句集までに散りばめられたような珠玉は少なく、青春期の煩悶や家族の死をめぐる慟哭など素材そのもののインパクトも弱い。しかしながら、それらを背景にしつつ至りついた龍太の現在地がうかがえ、滋味に富んでいるのではないだろうか。

卯の花腐し山国は墓所多し

（昭和50年）

【定住】卯の花が咲く頃に降り続く長雨を卯の花腐しという。本格的な梅雨ではないが、華やかな春たけなわの名残の高揚感を鎮めるように降る。どこもここも濡れそぼつ山間は取り立てて目を引く風物はなく、用もなければ通行する人影もないが、墓は人影に代って人の気配を感じさせる。山裾が切り開かれ、地域ごとの一まとまりもあれば、一族だけのこじんまりとした墓域もある。道野辺には無縁仏や言い伝えの残る苔むした墓もぼつねんとある。こうして山国の集落や木々が途絶えた箇所には幾つも墓が数えられる。家々も少なく、人々も多くはない山国に墓が多いことは、そこに暮らしをつないできた幾世代もの長い年月が流れていることを物語っている。そこが他ならぬ龍太の母郷である。

花さげて虚しき秋の影法師

（昭和50年）

【角川書店】「重態の角川源義氏を見舞ふ」の前書がある。角川源義は、実業家・国文学者・俳人・角川書店の創立者である。俳人としては俳誌「河」の主宰として、1700人の門弟の上に立っていた。作家にとって信頼できる人物との出会いは必須の条件である。龍太の多方面の活躍は、角川書店初め各出版社が活躍の場を提供し、推輓したところも大きい。角川書店は月刊「俳句」によって、秀句・名句の発掘、新人の育成、俳論の深化などに大きく貢献してきた。企画を担当する編集者の俳句観は俳壇を牽引する力がある。その出版社の社長であり、俳誌「河」の主宰であった角川源義は、俳句文学館の設置の資金提供など社会的な視野に立った活動をした。龍太と同じ山梨県出身で角川書店の「俳句」編集長の任に当たった鈴木豊一は、毎日山梨から出勤し、龍太を深く尊敬し、龍太から絶大な信頼を得てきた。龍太は多くの文化人と対談を行い、雑誌・新聞掲載やテレビ放映がされているが、昭和47年には角川源義と対談し「昨日の話今日のこと」が「俳句」に掲載されている。角川源義は昭和50年10月27日、肝臓癌のため58歳で永眠、「秋燕忌」として歳時記に記載されている。時に龍太55歳、見舞いの花を片手に提げた自分の影法師を虚ろに感じている龍太である。

餅の筵にいんいと古時計

（昭和51年）

【静かなる旧家】迎春の準備に餅搗きがあった。一家総出の一日がかりの大仕事であった。子どもも年寄も男も女もそれぞれの役割があって、大忙しである。もち米を洗ったり道具を運んだり、前々から整えておく。大釜に蒸籠を乗せて米を蒸す。勢いよく湯気が立ち上り、蒸し上がった米をえいやとばかり裏返しに石臼に移す。杵を持った男衆が最初は細かく杵を動かして蒸米をつぶしにかかる。その辺りからが佳境、いよいよ力の限り杵を振り上げ振り下ろし、べったんべったんと搗き上げていく。女衆は臼の中に手を入れて素早く裏返ししていく。こ

の一組の呼吸が見もの、子ども達が集まってくる。大家族になると十臼はかるく搗いただろう。近隣や親戚などに配る分も搗いた。午後には家中に莫塵が敷かれ、所狭しと餅が並ぶ光景が広がる。後は時間をかけて干して保存食に仕立てていく。翌日も干す。長々と書いてきたが、このような騒動があって後に訪れる屋内の静寂である。そうした営みの傍らに大きな古い柱時計が時を刻んできた。餅搗きは一家繁栄の証であるが、一家の喜怒哀楽の歴史も見てきたことだろう。「いんいんと」が重く響く。一齣一齣の仔細を秘めて深い沈黙の中に正確な時を刻み続ける。

元日やしんと遺影のあることも

(昭和52年)

【飯田家】元日は先祖への祈りを捧げる行事でもある。親類縁者が訪れると、まず、仏壇に手を合わせ、遺影を仰ぐ。賑やかな挨拶や遊びはその下で行われた。鴨居に何代かの肖像が掲げられている家が少し前までは普通に見られた。家の歴史が一目瞭然であり、自ずから先祖を祭る心がはぐくまれた。遺影は一年中同じ位置に「しんと」厳かにある。その見慣れた光景が、元旦らしく感じられる。

行年五十歳漱石は石路の黄に

(昭和52年)

【断筆への伏線】この年、龍太は五十七歳である。明治の文豪漱石は森鷗外とともに聳える山のような存在として、文芸を志す後続のしるべとなってきた。芭蕉を思えば芭蕉の人生も五十であった。不朽の名作がかつきり五十年の中に凝縮している。かくありたい人生である。すでに名を成していた龍太であるが、人生五十年は何を思わせたのだろうか。後年の主宰誌「雲母」終刊や自らの断筆はこの辺りから伏線が敷かれていたのだろうか。潔い数字に魅せられていただろう。

花栗の香を隣国の怨となす

(昭和52年)

【山住】栗の花の香りは強い。香りではなく臭いとしたような、強烈で、しかも、暑苦しく、悩ましげな匂いである。生物の習性では匂いは生殖にかかわり、移動できない植物はその匂いで昆虫や鳥をおびき寄せて受粉を手伝わせるといわれている。栗の花にあれだけ個性を發揮されては無視はできず、うまく操られることになるだろう。そこを龍太は「隣国の怨」とした。土地の歴史を繕けば領土争いは世の常、争いは領土のみならず水や資源などにも及んだだろう。争いに争いが重なり、積り、人的被害もなかったとはいえない。栗は怨念というそら恐ろしい感情が渦巻く国境に立つ。向こう側の巨大な見張り番のような栗である。見張り番はその厳つい風体で相手を威嚇するものだが、匂いという意想外の武器をかざして脅威を与えている。

## 二、句集『今昔』

あとがきは、「句集『今昔』は、『涼夜』につづく私の第八句集である。昭和52年晩夏から56年初夏まで、約四ケ年の作品から、計230句を収録した。（中略）なほ、句集名「今昔」は、今とむかしと。それ以外に格別の意味はない。」あり、中略した2文を加えても合計6文の短さである。「自選150句」には10句を選んでおり、「自選80句」には12句を選んである。両者に重なるのは7句である。

### 1、龍太「自選150句」より

存念のいろ定まれる山の柿

（昭和52年）

【抽象から具象へ】存念の辞書の意味は「いつも心の中にそうでなければならぬと思っていること」、言葉を換えればあるべき姿、そうなるべき覚悟、理想となろうか。語感には、精神的な修養を積み重ね、歳月の精進を経て至れる精神的境地というニュアンスがあり、仏教臭が含まれる。ちなみに一日分の新聞から探し出そうとしても探し出せそうにない言葉、つまり日常会話には出てこない言葉である。世代によってはなかなか親しめない語である。教養書などの読書によって習得・理解される種類の言葉である。ということは、俳句に用いるにはよほどの計算がなければ成功しない。教養・教訓の類は俳句とは真反対に存在する。そこから詩情を得ることはかなり難解であり、使用が憚られる理由である。まして、上五に置くには重い。その言葉を据えた。「存念のいろ」とは、抽象的な表現である。存念なるものに色彩があるはずではなく、答の導けない禅問答のようである。存念というものにたどり着くのはもとより容易ではないことであり、文句なく読者を得心させる答の準備がなくてはならない。そして、その答を「山の柿」として下五に持ってきた。見事な答である。存念の色を山柿の色とした。柿こそ日本の秋を代表する色である。深みのある朱色は一色ではなく、青も赤も茶も黒も黄も複雑に交じり合って不均一な濃淡をつける。鮮やかな赤系統でありながら、渋い。それは、日本人の視角に最も受入れられ易く、感動させられる色である。一朝一夕に出来たとは思えない色が心を捉える。現実には青柿から半年ほどで熟するが、物理的時間以上の時の堆積を感じさせる。桃栗三年柿八年などというが、それをはるかに超えた歴史的時間の凝縮を柿の色に見るのである。存念の色が定まるまでの時間を考えると、柿の色は示唆に富む。

柚子の花はいつれの世の香ともわかず

（昭和52年）

【古典文学性】我が国には香りの文化および伝統や伝承が一般的には広まらなかった。文学の中では、「花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」がよく知られる。柚子も柑橘類の一種

とすると、龍太は柚子の香りからこの和歌を口ずさみ、平安の昔へと連想を広げていったらう。和歌は香りを嗅いだ時点からさらに昔へと思いを遡らせたが、龍太もまた現時点から過去へ、自らの経験した香りの記憶をたどり、さらに間接体験の記憶へと思いを遡らせていったことだろう。そして、今香っている柚子が直接体験の過去か、間接体験の過去か、昔の和歌や物語のことなのか判別し難く、このような述懐になったのではないか。柚子の香りは龍太の身ほとりにあって、龍太の心を、その記憶を時空を超えて遊ばせるよすがである。柚子の花はきりと澄んだ清々しい香りを放つ。龍太句集には柚子が多く取められている。

去るものは去りまた充ちて秋の空

(昭和53年)

【思想性】「去る」の対義語は「来る」である。来たものは去るのが世の習わし、来て去るものの何と多いことか。朝が来て、夜が来て、今日一日が去り、明日が来て、四季が訪れ、一年が去り、来年が来る。時という抽象的なものも然り、人や渡り鳥、季節の具体的なものも然り、この世の多くのものが然りである。この句では「去る」の対義語として「充つ」を使っている。去るの対義語としての来るには明るさや希望が感じられ、充つにはより明るく楽しい気分が強い。去るには見送る淋しさや虚無感が漂うが、来るには喜びが、充つにはさらに幸福感が含まれる。「秋の空」に一端は満ちていたものがすべて去ったというのであるが、「去るものは去り」には良いも悪いもことごとく去るというニュアンスがある。また、空に限らず地上からもという含みがある。去らずにいて欲しいものが去りゆくを見送る心理には、愛惜のあまり腹立ちさも混じる。それゆえに新たにやって来るものによって心充たされるのである。最初の七音の厳しい口調には相反する心理が投影され、その反動のようにつづく五音には手放しの喜びがこもる。秋の空にやって来るものは何だろう。夏の空から秋の空へと移りゆく自然界の変化を受容し、人間界のこともまた受け入れる。

青柚子の右に左に雨の音

(昭和53年)

【聴覚から視覚へ】黄色く色づくまでは柚子の実が目立たないが、しばらく見ているうちに葉の茂みの中から小さな実が見えてくる。雨の日など葉や実を伝って雫が落ちていく辺りには清新さが漂う。目に清々しい。一つ一つの実を濡らして雨が降る。傘を差して柚子の木の傍に立つ。右に左に雨音が耳を打つ。柚子の青い実も右に左に雨が降り注いでいる。雨音は実をすっぽりと包んで降っているはずだが、自分の左右の耳を打つ雨音を柚子の両側にも見ているのである。音を聴覚から捉え、次に視覚で捉えた。

返り花咲けば小さき山の声

（昭和53年）

【山国甲斐】桜や躑躅が時ならぬ季節に一、二輪咲くことがある。色も大きさも時を得て咲いた花よりは淡く小ぶりである。冬枯れの中の可憐な様子が目をひく。思いがけない存在である。一輪見つけると他にも咲いていないか見回してしまう。桜の一輪ならば梢を見上げ、樹木を眺め、その背景にある山も眺めるだろう。返り花は山からの小さな贈り物だったのだ。視覚から聴覚へ、否、心に映った冬景色である。

河豚食うて仏陀の巨体見にゆかん

（昭和54年）

【秀句の条件】河豚と仏陀を同じ一線上に置いた。河豚は食べるもの、仏陀は拝むもの、いわば生理的なものと精神的なものという次元の異なる二物を同格に扱い、そのギャップからくるおかしさがある。河豚は冬の味覚として河豚鍋や河豚刺などにされるが、味覚以前にぷっくりと膨らんだ形がイメージされて読者の頬を緩ませ、次に食うという行為に生唾を催させる。食うという具体的な動詞は極めて日常的な生活そのものであるが、食うものが河豚となると日常的ではなく、一冬に一度くらいの馳走である。腹ごしらえをしてから大事に備えるということではなく、河豚を食うこと自体が一大事といっても言い過ぎではない。となると、卑近なものやそうでないものとの組合せというギャップは薄れ、仏陀と河豚を食うことが意味上において同レベルに変化してくる。さらに、「巨体」にものを言わせている。仏陀を見に行くのではなく、巨体を見に行くことに重さが傾く。となると、巨体の相撲取りを見に行く、巨体の象を見に行くこととさして変わりはない。対象への宗教的関心や芸術的興味から「見にゆかん」としてしているのではなく、大きさに対して好奇心を刺激されているのである。

句の意味は以上のようなことであるが、これまでの龍太作品の傾向からすると、これが現実の事柄とは考え難く、単に冬のとある一日の実際であるか、疑問が生じる。平成の現代の俳壇で誰かが発表した句としてみればさしたる疑問はないが、表面だけをなぞると違和感がある。龍太が俳句について述べた文章を次に引用する。

『秀品名作と称するものは、すべて平明である。詩人俳人であると否とにかかわらずなく、誰もが理解し得て、誰のころにも感銘共感を与える作品である。わけても俳句は、古今、この原則を貫いている。誰もが感じていながら、いままで、誰もいわなかったことを、ずばりと言いつめた俳句。それが名句の最大の条件である。奇手奇才はすべて二流。平明を嫌厭するのは、とかくこの手の作品を賞讃する。だが、真の具眼とは、奇手奇才の衣装をすて、その奥にある不変の真実を見出すことである。』（『俳句年鑑』昭和61年12月刊）

龍太のこの主張からすると、掲句が平明から著しく逸脱している訳ではないが、一般的な共感を得る句ではなさそうである。心理的な何かが投影された上でのフィクションとも考えられる。この時、龍太59歳、仏陀の世界に近づきつつあるという意識があったか。死への意識で

ある。それを正面から詠むにはまだ老いは迫ってはいない。茶化するような惚けるような、否、恥じらいではないか。いずれ迫り来るものへの直視を軽妙なフィクションで言ってみたのではないか。第八句集に他に多くこの趣向が見られるものではないが、問題作として指摘しておく。

ふるきよきころのいろして冬スマレ

(昭和54年)

【視覚的郷愁】色にも時代がある。花にも時代がある。その両方が重なるとある一定の時代を特定する。色はスマレ色、花はスマレとなると「ふるきよきころ」は、ある世代までの人々の子ども時代よりも前ということになりそうである。古いものが案外よいという認識は、社会の急速な変化に晒されている現代の若者にもあるが、案外という言葉を外すとやはりある世代までに限定されてくる。そのよさを知らないで育った世代に理解を求めるのは無理難題の類である。スマレはその形が大工道具の墨入れに似ていることからの命名だといわれる。パンジーが幅をきかせているが、決してあれではない。野に咲く可憐な小さな花である。日本原産であるが洗練された洋装の少女を思わせる。決して田舎娘ではない。タンポポなどと比べて愛らしさの意味合いが違い、あんなに小さく手の届く花であるにもかかわらず、我が物にはできないような一種の高貴さが備わっていて、どうにも人の心をそそる。龍太はスマレの形ではなく色に目をそそぎ、色に郷愁を覚えている。紫は古くから高貴な色とされ、紫への日本人の感情には単なる色の種類を超えた心理的なものが潜んでいる。畏れ敬うという感情に近い。「ふるきよき」をそこまで遡ることはないが、それが日本人の無意識の感情である。失うか、それに近い状態でなければ郷愁は湧いてこない。冬スマレの珍しさ、その濃い紫に懐かしさを覚え、さらに懐かしいものへといざなわれたのである。表記上の特徴としては、平仮名の多用するとともに漢字・片仮名を織り交ぜている点にある。花の可憐さを平仮名の多用によって、対象への郷愁を片仮名に、季節感を漢字一字に託したのではないだろうか。

鹿の子にももの見る眼ふたつづつ

(昭和54年)

【人間性】「どの子にも涼しく風の吹く日かな」「月の道子の言葉掌に置くごとし」など、龍太の幼いものへの優しい眼差しは、幾つもの作品にみられるが、この句の自愛はこれまた格別である。鹿の子の愛らしさはどこをどう切り取っても十分に伝えられるが、姿全体の中から大粒の黒々と澄んだ愛らしい眼の一点に絞り込んだ。ふたつの眼には覗き込んだ自分が映っている。限りなく愛らしいものの最も愛らしい円らな瞳の中に自分を発見したときめきはさらに鹿の子への感情を高ぶらせる。ものを見る役目を負った眼、一對の眼、その動物一般の普遍を改めて言葉にしてみることによって、生きとし生けるものへの慈しみの情を深め、殊に稚さに心を揺さぶられたのである。

鳥帰るこんにやく村の夕空を

（昭和56年）

【ほのかな滑稽】 独自性は平仮名を取り入れた「こんにやく村」にある。おそらく龍太以前には、蒟蒻を栽培する村は蒟蒻生産地・蒟蒻特産地などと表現され、この表記はなかっただろう。蒟蒻という漢字表記は売り場などでも一般的ではなく、人々に親しまれている普段の食べ物には平仮名がより相応しい。その蒟蒻を「こんにやく」とし、さらに「村」を付けて複合語とし、半固有名詞化した。「こんにやく村」には、素朴で善良な村人たちが仲良く生活を営んでいる。そんな昔話や民話に登場しそうな雰囲気がこの龍太造語には漂っている。俳句の要素に滑稽があるが、その愉快的気分が春の夕空の長閑さにつながる。渡り鳥はこんにやく村を中継点として遥々と飛行を続ける。

## 2. その他の作品から

香奠にしるすおのが名夜の秋

（昭和52年）

【おのが名】 立秋を過ぎると朝晩はめっきり涼しくなる。夜の秋とは晩夏の頃の夜の涼しさをいう。日中の暑さから解放され、人心地を取り戻す。夏を越せばとは、体力の回復の見込みとしてよく使われる言葉だが、もうすぐ時候がよくなるという手前であえなくなった死に向かい合い、ふと、思いを巡らす。薄墨を磨るのに時間はかからないが、その時間は思いがけず深い思索へといざなうものでもある。うす墨を磨り、自分の名を記す。自分の名前を書くことは龍太の日常には珍しくはない。俳句は一句一句の作品に名前を添えるというか、俳句は句と名前がセットになっている文芸ともいえる性質を持つため、名を書くことが極めて多い。しかしながら、香典という改まった非日常の場面においては、いつもと同じようにはいかない。いつも通りに書いていつもと違った感覚が残る。己の名であって、どこかしら違和感がある。死者への礼儀として自分の心をその名に託するために書くのだが、なぜだろうか、親しければ親しいほど自分と名前とが切り離されたもののように感じられる。葬儀に花や供物を用意し、そこに名が書かれる。多くは業者が準備するが、人が書いた自分の名前にも違和感を持つ。相手の死が自分の名前および自分の現在を見つめさせるのだろうか。名前は多くは自分で書く。自分が書いてこそ自分の名前である。しかしながら、自分で書きながら自分とは距離が感じられるということはないだろうか。名句は誰からも共感されるという龍太の主張が思い出されてくる。

ヒメムカシヨモギの影が子の墓に

（昭和52年）

【生涯の影】 「ヒメ」が付くものに心ひかれる。「ムカシ」も然り。「ヒメムカシヨモギ」とは床しい名前である。生物学上は植物の名前は片仮名表記がされるが、俳句では多くは漢字が使

われる。「姫昔蓬」という表記からは伝わってこないものがこの片仮名書きにはある。ヒメとは小さいという意味を添え、ムカシは懐かしいという感情を引き出す。そんな名を持つヨモギの影が墓石に落ちていたのである。龍太の悲しみの記憶は幼くしてあっけなく他界した次女純子のことに過ぎるものはないだろう。飯田家を次々に襲った不幸はどれも忍び難いものであり、さらに六歳の我が子を一夜のうちに死なせた親の苦しみはいかばかりであったか。第二句集『童眸』はそれらの句が収められている。歳月を経ても埋められないものがその後もこのような形で表れてくる。飯田家の墓地は桃畑や菜園などに隣接し、墓参りを目的としない外出時や散歩の折々にも何気なく立ち寄れそうなどころにある。親が亡き子の墓に何気なく立ち寄るということはありえないことかもしれないが、いつでも何となく足が向く墓参がいつも亡き子が心にある証のように思えて胸にせまってくる。墓石に一声かける、そんな墓参ではなかったか。自分以外にも幼い我が子をなぐさめてくれる存在を見つけて、龍太は涙したのではないか。可憐な名を持つ雑草が墓の下で娘と遊んでいるように見え、有難く、うっすら涙を催したのではないか。片仮名は幼子にも読めるようにと思ったからかもしれない。純子の死は昭和31年、この句はそれから21年後の作である。

草かげろふのごとく居て良夜かな

(昭和52年)

【比喩】草蜻蛉は緑色の羽をもつ蜻蛉の形をした小さな昆虫である。蜻蛉の字が不似合いなくらい弱々しく、「草かげろうのごとく」と仮名で書いているうちにも消えそうな虫である。はかないものの引き合いに出される。月の出ている秋の夜、自分の存在がその草蜻蛉のようにはかなげであると思う。良夜の響きに陰りはないが、秋も月も物思いを誘う。来し方を思い、行く末を思う。

草青む方へ亡き母亡き子つれ

(昭和53年)

【亡き母亡き子】あの世で再会ということがあるものか。あの世で出会って手を取り合うということがあるものか。そのように思えたならば悲しみも苦しみもどれほど癒されることか。我が子の死は脳裏から離れることはない。幼く哀れ、この世の親が何一つ手出しのできないあの世である。祈っても、願っても、どうしようもないあの世である。そんな見知らぬところで、独り、途方にくれ、怖がってあの子が泣いているかという想像は親を激しく苛む。自分の母親の死も辛いものであったが、あの世で我が子を祖母がかき抱いてくれているという想像は、大泣きしてもしきれない感動である。あるはずのないあの世が少しでも穏やかであってほしいと願う。そんな切ない思いがそうあってほしいという光景を見させた。草が青む方角は自分からは遠い。

午後はやも死んで帰りし夏座敷

（昭和53年）

【民俗学性】「七十余歳の老婆蚕室より転落」の前書がある。この句が愛唱句として上げられることは龍太自身が予想してはいないだろう。内容面からすると、禍々しく、身内のことでなければ記憶のみに留めたく、句集に入れるには憚られる事件である。村の重大事件であり、近隣としては日常に突起した衝撃であっただろう。まず、養蚕が日本の村の大きな産業であった時代を大写しし、とある村のとある農家のとある蚕室そして、夏座敷へと絞り込んでいく。そこに、どこにでも起こりうるその時代の日常の一齣があり、登場人物に息吹が吹き込まれていく。前書にそって読むと、死んだ老婆の生前の顔や言葉や働きぶりが生き生きと浮かび上がってくる。龍太のこの近所感覚は尊い。民俗学的な魅力もある。紆余曲折を経て、故郷に定住していった龍太の現在地が表れている句である。

ありし日のことの次第も明け易き

（昭和53年）

【人間への関心】前の句に続いて置かれているところから、同じく「七十余歳の老婆蚕室より転落」の前書にそったものと考えられる。死人が出れば村を上げての葬儀となる。寝ずの番は生前の思い出話を繰り広げる。事故の顛末も語られる。そんな短夜がはやばやと明け初め、その人生の幕切れのように思わせる。老婆のみではなく、この世は誰に対してもあっけなく過ぎ去る。

涼新た白いごはんの湯気の香も

（昭和53年）

【季語の有効性】夏の終わりになると、朝晩は日中の暑さが去り、秋めいて涼しく感じるようになる。暑さに苛まれた心身は、この涼しさに蘇生するかのような清々しさを覚える。生き返るとは新たな始まりと捉えてもよいだろう。暑い中に涼を求める心から「涼し」は夏の季語とされているが、「涼新た」「新涼」という言葉は、新たな涼しさ、リセットされた二度目の涼しさというニュアンスに捉えられる。そもそも「新た」とは長期間にわたらないものの状態をいう。夏は涼を求めているいろいろな工夫をして凌ぐが、「新涼」は人の能動的な行為にはよらず自然からもたらされる。昨日から続く日常の中に、昨日とは違う、どこことなく清新な気配があり、いつもと同じ「白いごはん」から立ち上る湯気の香りにもどこかしら清々しさが漂う。「新涼」とは、人であれ、物であれ、ものみな持つ本来のよさをとりもどさせる初秋の涼しさである。

## 蛇笏忌の空屈強の山ばかり

(昭和54年)

【雲母継承】蛇笏の死は昭和37年、それ以来、有名無名の俳人によって多くの忌日俳句が詠まれ、龍太も毎年のように追悼句を詠んでいる。忘れられないその日というものがそれぞれの人生にあるものだが、龍太にとって蛇笏忌は公私にわたって記憶される一日である。蛇笏を慕う俳人は全国に散らばりつつ、俳誌「雲母」に集う。蛇笏から「雲母」を継承した主宰として龍太の句は常に注目される運命にあったが、この句はその期待に十分に応えている作品である。山廬は峻厳な山々が圍繞する甲府盆地の一角にあり、甲斐といえば山々への連想が何にもまして先立つ大自然である。その山々を眺めながら煩悶から受容へとその精神を改造していった蛇笏であり、また龍太である。父の歩む道と子のあゆむ道は目指す方向を同じくしていた。俳句史に残る父の名であり、子の名である。この句は俳壇の重鎮からかつての同じく重鎮に手向けるに十分な格調を備えている。「屈強の山」は実景であり、蛇笏のその精神世界を重ね合わせるものである。

## 秋深し小店に母を見し夢も

(昭和54年)

【蛇笏の妻・龍太の母】亡き母へ、龍太の心はしばしば赴く。誰にとってもいつの時代も母はかけがえのない存在であるが、大きな不幸の波を幾つも幾つも被りながら耐えしのんできた母の傍らにあって、子である龍太の心は、深く、その母に寄り添うものであったことは想像に難くない。時代の不幸を被った多くの子の母と同じであって、悲しみはそれぞれに異なる。戦争に強いられた苦悶を取り去ることはその生涯になかっただろう。戦死・戦病死・病死、長男・次男・三男を相次いで奪われていった慟哭を母菊乃は露にすることはなかった。それゆえに母を泣いた龍太であつたらう。父蛇笏も母も龍太も肉親の死の悲しみを胸に畳み込んだ。その家族を労る家族の結びつきは強い。父母の死から歳月は流れ、そんなとある日の夢に母が現れたのである。近所の小商いの店で何を買っていたのだろうか、在りし日の一こまがその夢である。ささやかな平穏な一日が母にあったことの喜びが懐かしさを広げる。

## 良夜かな赤子の寢息麩のごとく

(昭和55年)

【含羞】よく知られた句であるが、龍太は自選から外している。龍太の含羞をこんなところに見る思いがする。龍太には子どもを素材とした作品が多く、秀句が多い。生涯、六歳で急死した次女純子の影を負っているとも言われている。人間には幼い者への優しい眼差しが本能的に備わっているのだらう、共感される句である。「麩のごとく」の見立てが、初々しい赤子の寢息をよく言い当てている。小麦粉を水でこねて、澱粉を取り去った食品である。汁などに入るとふやけてとろりとする。豆腐のような柔らかさではなく、舌の上ですぐには溶けず、わ

ずかな嘸み応えがある。赤子の寝息は吐いた息が麩の膨らみのような視覚的な柔らかさがあるが、柔らかさの中にも、すぐには蕩けない麩のほのかな強さのようなものがある。眠る赤子のいとけなさと生命の強さを麩に感じたものである。赤子とは保護される存在でありながら、育とうとする本能を有するものである。

#### 参考文献

- 俳句編集部編（1978）「俳句臨時増刊 飯田龍太読本」角川書店  
白露社編（2012）『白露句集』白露社  
飯田龍太（2005）『飯田龍太全集』第一巻～第十巻 角川書店  
飯田龍太（2009）『龍太語る』山梨日日新聞社

（2012.9.26 受稿, 2012.10.28 受理）